

中泉行正博士と研医学会図書館

安部 郁子

財団法人 研医学会図書館

研医学会図書館は、昭和28年9月8日に設立された財団法人研医学会の図書館である。2009年度末現在の蔵書数は85,106冊で、医学関連の図書・雑誌や和書漢籍等を所蔵している。この蔵書は現理事長・中泉行弘の祖父にあたる中泉行正が主に集めたもので、開業眼科医として診療する合間に本郷の古書店に出向き購入したものが中心となっている。眼科の図書館として知られているが、それ以外の分野の書籍も数多くあり、それをご紹介するのが本稿の目的である。

中泉家は現在まで12代続く医者の家である。初代は岐阜の出身で辻氏を名乗っていたが、2代目より名を中泉と改めた。明治時代、陸軍軍医として活躍した中泉正（弘化2～明治45）や、その養子となった中泉行徳（明治4～昭和20）の事績はいくつかの資料が残っている。郡上八幡で生まれた正は江戸で蘭方を修めたのち、再び上京して松本良順が頭取を勤める幕府西洋医学所で学び、浪華仮病院（大阪医学校）、東京医学校等に勤めたのち、陸軍に入り、陸軍軍医監にまでなった人物である。その子、行徳は武州忍藩士後藤弥兵衛の4男・朝太郎で、東大在学中の明治25年、中泉家の養子となって行徳と改名する折、なかなか承諾しなかったというエピソードが伝えられているが、眼科を専攻して河本重次郎教授に師事し、よき共同研究者として日本の眼科発展に貢献したと言われている。昭和6年ごろの銀座の地図には、行徳の名前の眼科診療所が記されており、今に至っている。

さて、行徳の息子のうち、長男・正徳は日本の放射線医学の基礎を築いた一人であるが、放射線科を選んだことで勘当され、次男行正が眼科を継ぐことになる。行正は明治30年生まれ。八高を経て東京帝国大学医科に入り、大正11年より眼科の医師として勤務する。戦傷者のための義眼製作、トラホーム予防、また色覚検査などの事業に携わり、日本眼科医会会長にも就任した。本好きであった行正は、海外の文献入手に困難をみていた戦後に積極的に欧米の眼科文献を揃え、若い研究者に提供していたが、これが研医学会図書館を作る動機となった。

所蔵の図書には江戸時代の眼科書をはじめ、わが国の近代眼科学の黎明期からの資料があるほか、戦後の混乱の中で古書店に集まっていた貴重な和書漢籍が揃えられている。また、数は少ないが、Theophrastusの*Historia Plantarum*（1552版）や*Les Oeuvres d'Ambroise Paré*（1614版）などの洋書もある。

和書漢籍の古いところでは室町時代、永正4年（1507）の記載がある『丹家の伝血脉』、永楽11年（1413）の識語のある『医家秘伝隨身備用加減十三方』（『極急遺方』『コクキウイホウ』とふりがなあり。序は宣徳3年）などがある。また『和刻漢籍医書集成』（エンタプライズ）の『医学正伝』『玉機微義』『傷寒尚論篇全書』『傷寒論後条弁』『外科精要』『察病指南』、『難經古注集成』（東洋医学研究会）の『難經本義大鈔』には研医学会図書館の所蔵本が提供され、影印版として普及している。

その他、森立之に関連する数冊の本がある。万延元年、立之の識語のある『本草経薬名攷』や林用之が写した『桂川醫話』『傷寒提要』『温疫論簡記』などである。その中に『千金方疏證』というものがあるのだが、帙の題箋には「未刊本“千金方疏證”森立之自筆稿本 佐久間洋行所蔵 昭和二十四年乙丑孟夏書帙改装」と書かれている。内容は原稿を作る前のメモ書きのようで、さまざまな項目が挙げられ、関連事項が書き付けられている。題箋にあるように、いくつかの小冊子をまとめたものなのか、幾人かの筆跡が認められ、黒い墨のほか、赤や青の文字もあるし、小文字で書入れがあったり、同じ項目が繰り返されていたりする。現在、翻字作業をしており、ある程度まとめられれば発表したいと考えている。